

なかにし ぶ
金山町中西部遺跡説明会資料

開催日 令和5年5月27日(土)
会場 金山町開発センター

◆遺跡の概要

中西部遺跡は、金山町大字大塩の只見川左岸に位置します(図1)。只見川の改修工事に先立って、令和4年に発掘調査を行いました。

- ・遺跡所在地：大沼郡金山町大字大塩字中西部
- ・調査面積：12,000㎡
- ・調査期間：令和4年5月9日～11月25日
- ・調査主体：福島県教育委員会
- ・調査機関：公益財団法人福島県文化振興財団

◆調査の成果

発掘調査の結果、数多くの遺構と遺物を確認しました(図2)。

確認した遺構は、住居跡、掘立柱建物跡、土坑(昔の人が掘った穴)、集石遺構、配石遺構、土器埋設遺構など、総数1,500基を超えます。

出土遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、石器、管玉、鉄製の刀子などがあり、その特徴から、縄文時代後期(約4,000年前)、縄文時代晩期終末～弥生時代後期(約2,800～1,700年前)、平安時代(約1,200年前)の遺跡であることがわかりました。

縄文時代後期 配石遺構と土器埋設遺構をそれぞれ1基確認しました。

配石遺構は、地面を長方形に掘り込み、その壁に川原石を並べたものです(写真1)。堆積土中から炭化したクリ、トチ、クルミが多量に出土しました。配石遺構は確認例が少なく、特殊な性格をもった遺構と考えられます。

約2m離れた位置からは、同じ時期の土器埋設遺構もみつかっています(写真2)。

縄文時代晩期～弥生時代後期 中西部遺跡でもっとも多く、遺構を確認しました。調査区の中央部では、径約50mの範囲に遺構が密集する

箇所を確認しました(写真3)。そこには、数多くの掘立柱建物跡(写真4)や土坑が掘り込まれ、土器や石器、管玉(写真5)などの遺物が多量に出土しました。掘立柱建物跡は約50棟を確認しています。

この他、調査区の北部には周囲に弧状に溝を巡らせた平地式の住居跡(写真6)が、只見川に面した平坦部の縁辺には集石遺構(写真7)があることがわかりました。集石遺構の性格については不明ですが、墓の可能性ががあります。

平安時代 竪穴住居跡を2軒確認しました(写真8)。いずれも平面形が方形で、カマドが造り付けられています。燈明皿として使われた土器が出土しました。

◆まとめ

中西部遺跡で確認したもっとも古い人類活動の痕跡は、縄文時代後期のものです。その時代の遺構や遺物の数は少なく、確認した遺構の性格から、人が住んだというより何かしら特別な活動の場となっていたことが考えられます。

縄文時代晩期の終わり頃から弥生時代中期まで約700年の間は、掘立柱建物跡や土坑が掘られるなど人々の生活の場となったことがわかりました。管玉を副葬する墓も造られました。出土した土器の多くには煮炊きをした際のコゲヤスが付着し、キビヤアワなどの圧痕を確認できるものもあります。

弥生時代後期の遺構と遺物は数が少なく、具体的な活動の内容は不明です。

平安時代には2軒の竪穴住居跡が建てられます。小規模な集落が営まれたと考えられます。

以上が、発掘調査によって明らかになった中西部遺跡の歴史です。



図1 中西部遺跡の位置

※図の加工・転載は許可しません。

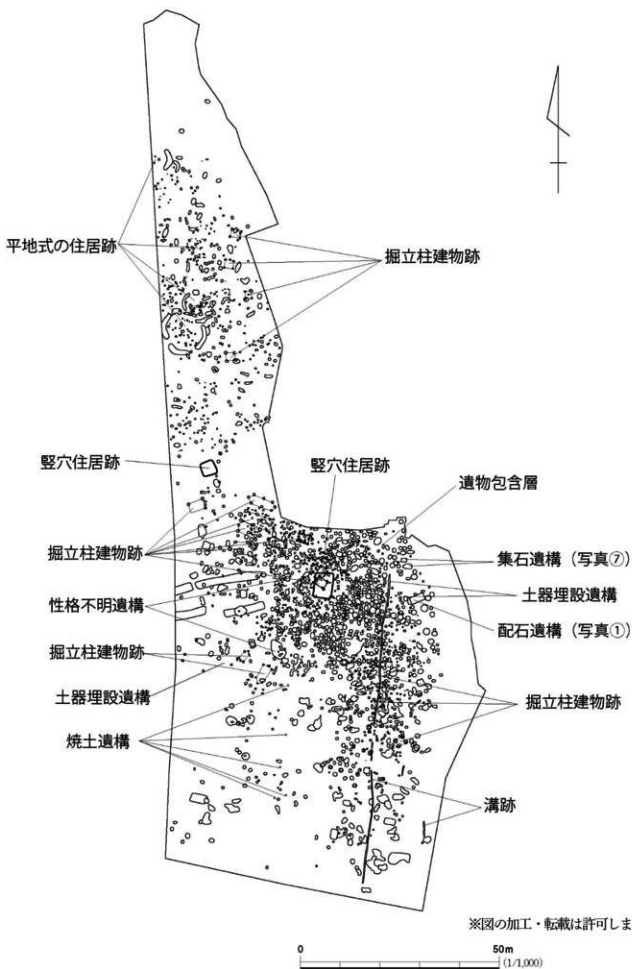


図2 中西部遺跡全体図



写真1 配石遺構



写真2 土器埋設遺構

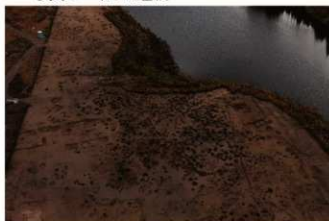


写真3 遺構密集部分

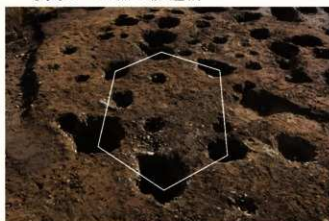


写真4 掘立柱建物跡



写真5 管玉出土状況



写真6 溝を巡らせた平地式の住居跡



写真7 集石遺構



写真8 竪穴住居跡

※図の加工・転載は許可しません。